

## パリ滞在時代(1930-1940)の岡本太郎

—《傷ましき腕》を中心に

佐々木秀憲(川崎市岡本太郎美術館)

---

岡本太郎(1911-1996)は1930年から1940年までパリに滞在し、アブストラクシオン＝クレアシオン協会に参加し多くの芸術家と知遇を得たことは周知のことである。岡本の秘書を永年務め後に養女となった岡本敏子は自著において「岡本太郎は戦前のパリで『岡本太郎』になった」と述べてもいる。パリからの帰国に際し、岡本は作品及び資料を持ち帰っているが、第二次世界大戦中の空襲により焼失したために、パリ時代の岡本に関する情報は断片的なものでしかなく、その実像を解明するには不十分であった。例えば、岡本のパリ滞在期間の住所がようやく解明されたのは2014年のことであった。ところで、岡本が所属したアブストラクシオン＝クレアシオン協会において交流の深かったハンス・アルプ、クルト・セリグマン、ジェラルド・ヴェリアミーらとの関連性から、同協会解散後の岡本をシュルレアリスムに帰属させようとする傾向が基調であった。ところが、発表者は昨年パリ、ブリュッセル、およびスイスの各都市において可能な限り資料を渉猟したが、1936年以降、岡本がアルプらシュルレアリスムの芸術家とグループ展等を開催した記録は、1938年の国際シュルレアリスム・パリ展への出品を除いては、管見の限り見当たらなかった。1936年以降の岡本の作品形式にしてもセリグマンとヴェリアミーの画風は近似しているものの、岡本の画風はむしろ擬古典的な方向性すら垣間見え、シュルレアリスムとはかなり異なった画風と突き進んで行くのである。セリグマン、岡本およびヴェリアミーによるネオ・コンクレティスムの活動は、1935年にパリのジュヌヌ・ヨーロッパで開催された展覧会以外には、何ら活動も言説も残していない。1938年の国際シュルレアリスム・パリ展への出品に関しては、1937年のサロン・デ・シュランデパンダンに出品されていた《傷ましき腕》を観たアンドレ・ブルトンがシュルレアリスム運動への参加を勧誘したものの、同運動との一定の距離を保ちたかった岡本は参加を固辞し、展覧会には協力したものである。そのため、岡本の名前はブルトンらのシュルレアリスム作家の名簿には当然の如く掲載されていない。つまり、1936年にアブストラクシオン・クレアシオン協会が解散したのち、クルト・セリグマンらとの交流は保ちつつも、岡本は抽象主義も超現実主義をも超越した独自の画風を模索していたのであり、その転換期の作品が代表作の《傷ましき腕》と考えられるのである。そして、この岡本の模索は、第二次世界大戦期の従軍期間を挟んで、戦後、「対極主義」と命名されたのである。本発表では、最新の調査結果を踏まえ、パリ時代の岡本太郎の様式の変遷を再考し、1930年代のパリ画壇で岡本が体得した芸術観が、従軍期間を挟んで、戦後の活動に継続され展開されていく過程を紹介する。